登校拒否を示した小学校１年生女児の１事例

研究第６部　権　平　俊　子
小　野　　翠

Ⅰ　は　じ　め　に

母子分離不安が原因で登校拒否を起した小学校１年生の女児に対して、遊戯治療と母親のカウンセリングを行なった経過を報告し、その機制について考察を加えたいと思う。

Ⅱ　生　育　史

(1)　本人K.E.（女）初回来所時年令　６才８か月
私立小学校１年生。

(2)〔問題〕３か月前頃より、学校へいくのを嫌がる。その頃より、母親にひどく甘えるようになり、どこへいくのにも、母親についてきてくれというようになった。母親がついていくといっても、登校しないことがある。

(3)〔生育歴〕（出生状態）父30才、母29才のときに第２子として出生、正常産、生下時体重３kg、母乳栄養で育ち、離乳は１才１か月である。

（発育状態）首のすわり―３か月、おすわり―７か月、ひとり歩き―１才１か月、話しはじめ―11か月

（既往症）１才半のとき脱腸の手術をした。風邪程度で大きな病気はしない。

(4)〔家族〕

実父―37才　大学卒、出版社重役（祖父が社長）

実母―36才　薬科大中退、祖父の経営する出版社の役員になっているが、出社することはない。

実兄―11才　公立小学校５年生、成績はずっとよい。

庭内別棟に父方祖父と祖母（実祖母は死亡、本年10月再婚）祖父の従弟の家族の家がある。近くに９世帯の親戚の家がある。

(5)〔登校拒否の経過〕

幼稚園は近くの幼稚園に２年保育で通園したが、問題なく過した。父も母の兄、弟が出身した私立大附属小学校を、幼稚園の頃よくあそんでいた友達が受験するので公立校より近いので、受験させたら合格した。兄の方は小学校は公立校がよいと思い、初めから受験させなかった。私立小学校なので、行きとどき、細かいこと、例えば、給食を食べ残したとか、忘れ物をしたとか、よく注意を受ける。特に男の子にはきびしい。K.E.は人が叱られても気になる。偏食が多いために給食を残すことに不安を感じているようなので、受持の教師に断って、先生は残してもよいということを了解している。次にあげるように、６月16日夜より、歯が痛くて発熱したのが動機になり、登校を嫌がり出した。登校拒否の状態については第１表に示したようである。

第１表

月	日	本児の状態
6	17(水)	16日の夜から風邪をひき、歯がはれて発熱のため休む。
	18(木)	〃
	19(金)	〃
	20(土)	〃
	21(日)	
	22(月)	朝、熱も下がり元気なので歯医者に寄って、母親と一緒に登校したが、教室に入るのを泣いていやがる。英語教室も休む。
	23(火)	元気なので登校、給食の後嘔吐、早退
	24(水)	登校をいやがり休む。
	25(木)	〃　ピアノのレッスン、途中で帰って来る。
	26(金)	登校をいやがり休む。
	27(土)	普通に登校。
	28(日)	
	29(月)	休む、英語教室も休む。
	30(火)	〃
7	1(水)	〃
	2(木)	母親と一緒に登校、３時間目から母親だけ帰る。ピアノを習いに行く。
	3(金)	休む。
	4(土)	〃
	5(日)	

7	6(月)	母親と一緒に登校、終り迄参観。
	7(火)	〃　〃
	8(水)〜10(金)	夏の学校、箱根行かず。
	11(土)	休む、家に閉じこもりがちで友達と遊ばなくなる。
	12(日)	
	13(月)	休む　この頃から、どこへ行くのにも母親について来て、甘えるだけ甘え、幼児に逆もどりの感じ。
	14(火)	〃
	15(水)	〃　この頃から、あまのじゃくになる。
	16(木)	プールがあるので、母親と一緒に登校、終りまで参観。
	17(金)	休む。
	18(土)	終業式、一緒に登校。
	19(日)	
	20(月)	プールが主だから一緒に行こうと言うが、いやがって休む。
	21(火)	プールが主だから一緒に行こうと言うが、いやがって休む。
	22(水)	夏休み。
8	18(火)	相談に来所。
9	1(火)	いやがって行かない、母親が一緒に行ってやると言っても10月5日まで休む。
	24(木)	相談に来所。
10	5(月)〜20(火)	母親と一緒に登校し、教室の中に母親がいれば行くと言って、その通りにした。ずっと授業を受ける。
11	21(水)〜6(金)	母親は、2時間だけで帰ってよいようになった。
	7(土)〜25(水)	教室の前まで母親が送って行けば行くようになった。
	26(木)	この日から、友達が誘いに来て、ずっと行くようになった。その後、問題なく、さっさと登校する。

Ⅲ　診断及び処置

9月18日に本児をともなって相談に来所。

知能検査の結果――I.Q. 111であった。（鈴木ビネー法）検査中の態度は、検査者が誘うと、入室のとき、母親を引張ってくる。入室後は母親が去っても気にしない。すぐ検査に応じ、ふだんと変らないような態度で検査を受ける。

C.A.T.の結果――①チロを小さいものに同一視する。母親と密着しており、赤ちゃんになって甘える。おっぱいを飲むなど退行している。小さいからできないなどの表現がある。

② 反面、自己顕示の欲求もみられる。

③ 極めて消極的な生活態度で、社会生活をしていく上で必要な攻撃性も認められない。攻撃的な場面を回避する、チロを傍観者的な立場におく。

④ チロ自身の失敗、親からの分離をさける、失敗する場面は姉（姉は実際にはいない、兄がいる。）を失敗者にする。

⑤ 生活領域が狭く、家族が中心になっている。友達の登場が少ない。

⑥ 学校場面に不適応行動がみられる。

⑦ 母親との関係は強く、密着している。母親の拒否的傾向はみられない。

⑧ 父、姉は登場するが、特に親和的な関係ではない。（実在の兄は登場しない。）

検査態度――母親からすぐ離れて応ずるが、すぐに解らないといって、自発的に表現しない。初めは画面叙述に止るので、かなり答をひき出すように働きかける。約半分くらいすんだところで、溜息をついたり、顔をこすったり、あきた態度を示す。途中、便所へいくが、母親のところへ戻り、母親と一緒にいく、後半、あと何枚、あと何枚、あと何枚ときく、かなり励ましが必要である。

小児科医による診断の結果――身体的には特に異常なし、脳波検査の結果は異常なし。

以上の検査結果から、K.E.の状態は特に精神病的ではなく、知能の発達も正常であり、何んらかの原因により、母親との分離不安が起り、そのため、登校拒否が現れたのではないかと思われた。K.E.に対しては、遊戯治療が、それと並行して、母親にカウンセリングを行なうことによって、問題が解決されるのではないかと判断できた。そこで、K.E.の遊戯治療を週1回、1回の治療時間は50分、昭和45年10月12日―昭和46年1月25日の間9回小野が行ない、それと並行して母親のカウンセリングを隔週に6回権平が行なった。その経過は次のようである。

Ⅳ 経　　過

1. 母親のカウンセリングの経過

母親は初めはK.E.に対して、否定的な態度を示し、「どうしてこんななんでしょう。よその子どもはどんどん学校に行くのに、家の子どもはどうしたのでしょうか、10月5日から、自分が一緒にいけばいくといったので、ずっとついていっている。みっともないし、自分がついていなければならない。何にもできない。何時までついていなければならないのだろうか」とのべている。カウンセラーは「大へんでしょうけれど、やっと、いきだしたのだから、もう少し努力して下さい。あせるといけませんし、登校しはじめれば、必ず一人でいけるようになりますから」と勇気づけていった。その後、10月21日に母親は2時間だけで帰っても学校にいられるようになってくると、希望をもつようになると同時に、K.E.の立場に立って考える余裕が出てきた。別棟に住んでいる父方祖母が病気になって、その看病をするため、義妹と交代で病院にいった。その後祖母が死亡すると、別棟にいる祖父の面倒をみなければならず、義妹と交代でやり、母親はK.E.をねかせてから、祖父の家に行き、家事をした。祖父がねるまでいて帰ってきた。この間、子どもが目をさまして、母親を探し、玄関まで出てきて泣いていることがしばしばあった。10月の初めに祖父が再婚したので、祖父の世話をする必要がなくなった。K.E.が不安になり、自分から離れなくなったのも、こうした扱いが原因だったのではないかというように、K.E.を理解するようになった。母親は非常に自由な家庭に育って、自分の家は若い人達のたまりのようであった。父は母親の兄の友人で、大学を中退して、結婚した。父の家庭は、きびしく、祖父は父のつとめる会社の社長でもあり、現在でも、父を大声でどなったりする。会社の会合などあると、母親も手伝わせられ、手伝いとK.E.を留守番させることが多かった。2才位のときには、母親に甘えるようなこともなかったのが、今になって甘えるようになったのではないかと、今までの扱い方を反省するようになった。兄は割合にしっかりしていたので、放っておいても安心だった。学校の成績もよい兄にK.E.はあこがれている半面、競争意識を持っているようであった。兄とちがう学校をえらんだのがいけなかったのではないかという気もしている。兄も中学校進学の際はK.E.と同じ学校を受験させるつもりである。受持の教師もK.E.をよく理解して下さり、家庭訪問にも3回きて頂いた。給食も嫌いなものは食べないでも放っておいて、強制することはなくなった。母親があせらずついていったところ11月7日から教室の前まで送っていくだけでよくなった。11月26日から、母親から離れて登校できるようになった。母親も安心して治療を終結した。

2. 遊戯治療の経過

第1回　45年10月12日

にこにこして入室、おもちゃを物色する。ささやくような小さな声で話したり、笑ったりする。風船をバレーボールのようにセラピスト（以下、T.とする）と打ち合う。“お家では、お兄ちゃんとやるの。フワフワボールって、スポンジので。お風呂へも持って入るの„ 等話す。

風船をもっとふくらませたり、他のおもちゃをちょっといじってみたりする。その頃から“〜落ちたジョ…ムチュカチイジョ、ダミュー„ 等幼児語を使いはじめる。折り紙を始める。“水仙を折るの„ と折るが、かなり折るものは複雑なのを覚えているようだが折り方は非常に雑である。帰りに風船を持って帰るという。“もう、来ないから„、“今度持ってくるから„、“同じのがいくつもあるから一つだけ„ 等粘っているが、とうとう、あきらめて帰る。

…はじめての治療場面に対する、とまどい、不安を、風船のうち合いで解消した後、家での事などを話しはじめる。その後更に部屋の中を探索した後、幼稚なことばを使うことで甘えを表現している。帰りにおもちゃを持って帰るという。T.はここで持って帰りたい気持を反射すると同時に持って帰れないという制限を告げた。これに対し、日常、それ的な要求をかなり、かなえられていることもあり、何度か、抵抗してみるが、あきらめている。

（10月19日　病気の為休む）

第2回　45年10月26日

T.の呼びかけに応じ、手を洗い、“いただきます„ といっておやつにする。少しテレる。食べ終って自分から手についた菓子の粉を洗い、ハンドバッグからハンカチを出してふく。そのハンカチでねずみ等つくる。“リボン„ といって頭にのせ、“その他、何？„ とT.にかまをかけ、ボイン（乳房、子供の中で流行中）とは自分ではいわない。折り紙でT.にしゃべりながら机、イス等折る。時間になって折った折り紙も“持って帰っちゃい

けないね。又、遊ぶように、ここのだからおいて行こう„と自分でいっておいて帰る。
…一度、病気の為、休んだので、前回から2週間目であった。おやつをテレながら食べる、テレをつくろうことからハンカチ遊びに移っていった。帰る時のことばから、前回T.の告げたおもちゃに対しての制限を受け容れていることがわかる。

（11月2日、文化祭の為休む）

第3回　45年11月9日

おやつを食べながら―今日は、タクシーでなく、バスで来た。学校へ行って、ママは、ここへ来る用意をしなければならないので門のところまでで帰り、（自分は）2時間で帰った。終りまで行くと一時すぎで遅くなるから、途中でごはんを食べて、私の筆箱を買って、大井へ寄って、それから来た。一等話す。筆箱をT.に見せる。磁石付、得意そう。ミニチュアセットを机の上にひろげる。大きい人形をT.がカゴから出すと“いいの、一人なの„と赤ちゃん人形だけ使う。あそび部屋、ごはんたべるとこ、庭、勉強机、ベッド三つ、等配置する。ベッドの一つは“ママのだけれど、ここに（自分の部屋）来てていいの。使っても。„という。終りを告げると“片付けましょう„と片付けるが、しまい終ると帰らずに風船つきをはじめ、しばらくやっている。
…文化祭の為、また2週間経っての治療であった。おやつの時の話から、母が先に帰る事、自分は学校に2時間いたこと、そして早退を合理化しようとする気持、そのあと母と過した楽しさ等、かみしめて、自分自身で納得しようとしていることがうかがえる。その後のミニチュアセットの遊びでは、学校場面の自信とは逆に、母から離れがたい気持を表現して、自立しようとして葛藤している姿をみることが出来る。一たん片付けながら、ぐずぐず帰り渋ることも、これらの躊躇を表しているといえる。

第4回　45年11月16日

何となく、あれこれ、まとまりのない遊びをする。舌たらずの、甘えたしゃべり方をしている。すぐ、自分の側にある物をT.にとってとたのんだり、簡単なことをやれないからとT.にしてもらったりする。うろうろしながら―自分の誕生日は12月22日でクリスマスと一緒に祝ってもらうが今年は辛い事がある。それは、一人で学校に行けるようにならないと誕生日は来年の12月まで来ない―と話す。外へ出て、幼稚園のブランコに乗りながら、自分の幼稚園にもあって、幼稚園は楽しかったと話す。時間になり、少し渋ってから帰る。

―前半の落着きのなさ、甘え等は、誕生祝の条件として一人で登校するよういわれたことに対しての不安とみることが出来る。しかし、それを表現した後、ブランコに乗り、非常にゆったりと幼稚園のことを想い、不安の中にも自信の芽生えの感じられる様子であった。

（11月23日　祭日）

第5回　11月30日

昨日曜日に高尾山へ行ってリフトに乗った由で、その切符、その時買ってもらったピンポン遊びをもって来所。しばらく、それで遊ぶが案外むつかしく、ドッヂボールにうつる。学校のドッヂボールはもっと堅いし、吉野先生（担任）がなげてくれるのはもっときついと得意そうに話す。プレイハウスを使い電話、ままごと等をセットしたところで時間終了、自分で片付ける。T.がままごとというと“これは、ままごとじゃなくて、普通のあそび„と訂正する。
…おやつを食べながら高尾山へ行った事を話す。その時リフトに一人で乗った事が非常な自信となっている様子。ドッヂボールをしながらの話にも、学校生活への自信がみえてきた。後半の遊びがどのような展開をみせるか時間終了になったのは残念であったが、T.の〝ままごと〟という表現への抗議から、成長した自分への自信がうかがえる。

第6回　45年12月7日

黙々とおやつを食べる。ボールあそびをしたあと、黒板に向って、算数の問題をかいてT.にやらせる。自分が答がわからなかったり、間違ったりでやめてしまう。T.に目をつぶらせて、自分の描く絵を“何だ„とあてさせて得意がる。
…T.に算数の問を出したり、T.にわかるはずのないことを当てさせたり、T.があてるとそれを自分の絵のうまい事にきりかえたり、自分の優位を顕示しようとしている。学校へも一人で登校出来るようになり、母親も安心して気をぬいた時期といえる。K.E.としては、もう大丈夫ねという期待に添うための自信の裏づけを求めたといえる。

（12月14日　病気のため休む）

第7回　45年12月21日

おやつを食べながら、一ともだちを呼んで、お誕生日会をした事、お家の人（パパは仕事でいなかった）でごはんをたべた事、お正月の着物は、ママのを、おばあさんに縫い直してもらったのが、それも小さくなった―等話す。落着いた感じ。おやつの後、ドッヂボールのなげ合いをしたり、一人でサッカーの真似をしたりする。
…お誕生日を皆んなに祝ってもらったことなどですっかり落着いた様子、ママの着物も小さくなった事、そし

て、その事を喜んで認めていけるようになっている。

（46年1月4日　年始休暇）

第8回　46年1月11日

おやつを食べたら―もう、ずいぶん、漢字を習った―という。二年生になるのが、非常に得意そう。えのぐを出し、土、花、太陽を描く。そして、“こんな字、知ってる„と漢字をいろいろかいてみせる。7曜日をかく。

そして、一水曜日が一番好き、それはピアノを習う日だから。その次は月曜日で、ここへ来る日だから―といってから“でも学校の方が面白いね„という。あとは、えのぐで絵をかくよりもパレットで色を混ぜて、こねてどんな色になるかを試してあそぶ。

…年始休暇をはさんで20日ぶりのセッションであった。学校に対しての自信にあふれるような態度であった。

（1月18日　病気のため休む）

第9回　46年1月25日

10分程、遅れて来所。母：“学校を済んでくるとギリギリで„という。

おやつを食べたりして時間をとり、遊ぶ時間はあまりなかった。ボール、風船、ピンポンなどで、つきっこをしたりする間に終了。のびのびした感じ。

…遅れてきたため、時間が短かかったが、落着いてのびのびした態度であった。前回予告した終了することについても何もいわず、いつものように帰って行った。

V　予　　後

その後、登校を嫌がったことは一度もなく、2年に進学し、元気で通学している。友達もおおぜいでき、楽しく遊ぶようにもなった。

VI　考　　察

幼稚園時代には、何ら登園に問題をおこさず、小学校入学後、3か月位で登校拒否を示した事例を報告した。

我々は、登校拒否の中でも多くの学者によりその原因についてはいろいろいわれているが、本事例はその中の母子分離不安によるタイプであると判断した。

Pine, F. らによれば、「母親からの分離の度合いは、子供がそれを必要とする時に、母親との接触とコミュニケイションをもたらすことが可能である時にのみ、それを持続させることが出来る」といわれるように、本事例のこの点につき考えると、K.E.は2才頃には、かえって甘えることもすくなく、母も又、強いてだきしめるタイプではなかったと思われ、母親自身も、他の子が甘えてくる時期にK.E.は甘えて来なかったと述べている。こうした点からK.E.の母と子の関係は普通の母子が示すような密接した、親和的関係がないままに形の上で母子分離が成立していたようにみえていた。

ところが、祖母の病死に引続き、祖父の世話のため、夜母がK.E.を置去りにし、母の姿が見えず、泣いていた事等の経験が動機づけになり、母との分離に不安を感じ登校拒否という形であらわれたのではないかということが推定出来よう。

また、K.E.は兄と年令の開きもあり、兄は成績もよく、しっかりしていたので、二人で父母の留守をしたり、競争相手である半面むしろ、兄は保護者的役割をとり、K.E.の精神的支えになっていた。そのため、兄にあこがれもし、尊敬もしていた。その兄と違う学校であるということから自分の学校に対し不満を感じていたのではないかということも考えられる。K.E.の学校は、私立で特に男子に厳しい学校であり、給食時に先生が男の子の偏食を厳しく叱るようなことがあった。K.E.は自分が叱られたのではなくても自分自身も偏食があり、給食がいやであったので自分も叱られるのではないかという不安を感じ給食の事について特に気にするようなことがみうけられた。そして、歯痛のための欠席がきっかけとなって、退行現象をおこし登校拒否を示し、母に甘え、母と離れられないという行動をとるようになり、そのため、母親は、他の子は元気で行っているのに自分の子だけどうして学校へ行かないのだろうと心配もし、不安をもち、K.E.に学校に行くように叱ったり、なだめたりして、圧力をかけ、その結果、更にK.E.に情緒不安をつのらせ、悪循環をとってしまった。母親はK.E.の自分から離れられないことに不安を感じ叱ったり、つっぱねたりはしたものの、K.E.は一人で学校へ行くという形をとらないまま仕方なしに母親がついて登校させたりはしていたものの自分がついて行っても登校しない状態になってきたので一層不安を感じ、ただオロオロしていたが、親類の者から当所に相談にいくよう、すすめられ相談に来所した。

我々はK.E.の登校拒否の原因が母子分離不安にあると考え、当所でも登校に際しつきはなしたりせず、一緒

に登校して、徐々に離れられるようにすることが一番よいと考え、そのように指示した。母親自身も自分のとっていた行動が当所においても間違っていなかったという事を確認すると学校についていくということについての不安をかなり解消したようであった。母親はカウンセリングがすすむにつれて、今までのK.E.の扱い方を反省すると共にK.E.の気持を理解し、母親として、K.E.の甘えを満足させるような役割をとることが出来るようになった。K.E.も遊戯治療の中で、母親から離れて入室し、退行現象を示しそれを治療者に受容されることにより、自信をとりもどし、だんだんに他の社会生活においても、適応行動がとれるようになってきたものと考えられる。又受持の教師もK.E.をよく理解して家庭訪問をしてくれたり、支持的な扱いをとり、K.E.の問題解決に努力を払って下さったことが、K.E.の学校生活に適応することが出来た一つの条件として見落すことが出来ないと思う。登校拒否は子供側の母子分離不安等の情緒障害が原因となってあらわれることが多いのではあるが、不適応状態を学校場面で示すので、教師の扱い方、態度等が問題解決に影響することが大きいものである。本事例では、受持の教師の協力と母親自身に深い情緒的問題がなかったためにK.E.を理解し受け容れることが出来たので、短期間で問題を解決出来たと思われる。

〔文　献〕

1) Axline V. M.: Play Therapy: Houghton Miffin. Boston 1947.
2) Bowlby J.: Separation Anxiety. Int. J. psychoanal., 51 89-113, 1960
3) 鷲見たえ子他：学校恐怖症の研究、精神衛生研究 8、27—56、1960
4) 鑪幹八郎：学校恐怖症の研究(II)、心理療法の結果の分析、児童精神医学とその近接領域 Vol. 5 79—89、1964
5) 髙木隆郎：学校恐怖症、小児科診療 26、35—40、1963
6) 土居健郎：精神療法と精神分析、金子書房 1961
7) 小島謙四郎：乳児期の母子関係、医学書院 1968
8) 園原太郎・黒丸正四郎：三才児、NHK 1966

Report on a Girl who refused to attend Primary School

Dept 6　Toshiko Gondaira
Midori Ono

This is the report of a girl of the first grade of primary school who refused to attend school because she was anxious about separating from her mother.

After the girl was treated in 9 play therapy sessions while her mother had 6 sessions of counseling, the girl started attending school, and the therapy proved successful. She hasn't shown any problem since then.

The mechanism of her problem and the process of therapy were discussed.